

# Nara Women's University Digital Information Repository

Title	否定の語用論研究をめぐる境界問題
Author(s)	吉村, あき子
Citation	吉村あき子 : 奈良女子大学文学部研究教育年報, 第5号, pp.57-69
Issue Date	2008-12-31
Description	
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10935/3087">http://hdl.handle.net/10935/3087</a>
Textversion	publisher

This document is downloaded at: 2017-10-21T10:14:54Z



は、Ladusaw (1980) によって、(5)に示したように、downward entailing (下方伴立 (以下 DE とも表記)、または monotone decreasing (単調減少 (以下 MD とも表記)) 特性を持つ要素によって認可されることが示された。(6)は、否定辞の作用域は、上位集合から下位集合への推論を認可する DE 環境であるが、肯定文はそうではないことを示している。そして実際(7)が示すように、DE 環境である否定文の not の作用域には NPI が現れるが、DE ではない肯定文には現れない。この分析が広範囲にわたる NPI 現象を説明することはよく知られているが、一方で(8)(9)に示したように、only や barely に代表されるあるタイプの DE 特性を示さない要素によっても NPI が認可されることもよく知られた事実である。

- (5) a. A negative-polarity item is acceptable only if it is interpreted in the scope of a downward-entailing expression. (Ladusaw 1980: 13)  
 b. An expression is downward-entailing iff it licenses inferences in its scope from supersets to subsets. (ibid.: 7)
- (6) a. John doesn't walk. → John doesn't walk slowly. (否定文/ not: DE/MD)  
 b. John walks. ↗ John walks slowly. (肯定文: non-DE)
- (7) a. I haven't ever met any popular musicians at the bar. (否定文: NPI 認可)  
 b. \*I have ever met any popular musicians at the bar. (肯定文: NPI 認可不可) (吉村 1999: 3)
- (8) a. Only Socrates entered the race. ↗ b. Only Socrates entered the race early. (only: non-DE) (Horn 2002: 71)
- (9) Only young writers ever accept suggestions with any sincerity. (only: NPI 認可) (Horn 2002: 69-70)

Horn (2002) は、よく似た意味を持つが NPI 認可については正反対の分布を示す almost と barely、almost と not quite を比較分析し、NPI の認可に関係するのは、意味論的な概念の downward entailment ではなく語用論的な概念の downward assertion (下方断定 (以下 DA とも表記)) であると主張する。そして only の振る舞いもこの downward assertion によって正しく予測することが出来ることを示すことによって、その妥当性を主張する。以下その主張点を簡潔に示そう。

Horn (2002: 62) が「ドラマチックなコントラスト」を示すという almost と not quite を取り上げる。almost と not quite はどちらも、(10)に示したように同じ 2 つの意味構成要素を持つと分析され、それらを伴立 (entail) すると考えられる。(10 a) の almost の「x はほとんど F だ」は、右辺の第 1 項の proximal conjunct (近接項)「x は F に近い」と第 2 項の polar conjunct (極性項)「x は F ではない」のどちらの意味も持っており、(10 b) の not quite の「x は完全には F ではない」も同様に、右辺第 1 項の近接項「x は F に近い」と第 2 項の極性項「x は F ではない」のどちらの意味も持っている (伴立する)。

- (10) a. x almost F's = x is close to F + x does not F  
 b. x does not quite F = x is close to F + x does not F  
 <proximal conjunct>+<polar conjunct> (Atlas 2007: 10)

しかし「F に近い」を表す近似項と「F ではない」を表す極性項は語用論的に同等ではない。almost と not quite は、その語用論において違いがある。例えば almost を伴う (11 a) の話者の意味は、典型的には (11 b)「危うく死にかけた」ことが too bad であるということであるのに対して、not quite を伴う (12 a) の話者の意味は、典型的には (12 b)「死ななかつた」ことが too bad であるということだといえる。almost を伴う断定文の話者の意味が近似項にあるのに対して、not quite を伴う断定文の話者の意味は極性項にある。そして (13)「私はあなたのパーティーに必ずしも出席したわけではない」が示すように、never quite は NPI を認可するが almost は NPI を認可

しない。

- (11) a. It's too bad you **almost** died in the accident [-now you'll need therapy].  
 b. It's too bad you came close to dying in the accident.
- (12) a. It's too bad you didn't **quite** die in the accident [-now I'll have to finish you off].  
 b. It's too bad you did not die in the accident.
- (13) I {never **quite**/ \***almost**} made it to *any* of your parties. (→ NPI 認可: not quite ○, almost ×)

not quite の話者の意味は not にあり、almost の話者の意味は close to にある。not quite は NPI を認可し almost は認可しない。このような事実に基づき、Horn (2002: 62) は(14)に示したように、「発話によって意味論的には伴立されるが、その発話の意味の断定された側面、したがって潜在的に議論的となる側面、のスコープの外にあるものは、assertorically inert (実然的に不活性) であるとみなされ、その結果、NPI 認可や関連する尺度志向の診断法に対して事実上透明であると見なされる」と主張する。

- (14) Semantically entailed material that is outside the scope of the asserted, and hence potentially controversial, aspect of utterance meaning counts as **ASSERTORICALLY INERT** and hence as effectively transparent to NPI-licensing and related diagnostics of scalar orientation. (Horn 2002: 62)

つまり、NPI 認可に関係するのは意味論的概念の「下方伴立 (downward entailment (DE))」ではなく、語用論的概念の「下方断定 (downward assertion (DA))」である、ということになる。not quite の場合、断定された内容は DE 命題であるのに対して、almost の場合、断定された内容は DE 命題ではない。先にあげたパーティー出席の例(14)の NPI は、not quite の意味によってではなく、語用論的に断定される内容が否定であるので認可されるのだ、と説明される。

この下方伴立 (downward assertion) の考え方に基づき、only による NPI 認可を Horn は次のように説明する。only NP を伴う (15 a) は、それから only を除いた肯定命題 (15 b) と、主語以外のものには述語が当てはまらないことを意味する否定命題 (15 c) を伴立する。Only NP を伴う陳述は、この両方の項を伴立するが、否定命題の項 (15 c) だけを断定 (assert) するので、NPI が認可されるというのである。

- (15) a. **Only** Muriel voted for Hubert.  
 b. Muriel voted for Hubert.  
 c. No one distinct from Muriel voted for Hubert.

断定されているものと断定されていないものの区別をする診断法として、Horn (2002: 71) は、Karttunen and Peters (1979) (以下 K&P) によって提案された「慣習含意 (前提)」の診断法を再定義して用い、その本質を、(16)に示したように、「本質的に、「前提されている」あるいは慣習的に含意されているもの — 我々の分析においては、断定されていないもの — は、叙実述語の作用域に入らない」と述べている。そこで、(15 a) の Only Muriel voted for Hubert を (17 a) のように叙実述語 It's too bad that... に埋め込み、それが (17 b) を断定するか (17 c) を断定するかを見ると、確かに (17 a) は (17 c) だけを断定していると考えるのが妥当である。It's fortunate that... を用いた(18)についても同じことが言える。

- (16) Essentially, “presupposed” or conventionally implicated material — on our account, non-asserted material — scopes out of factives. (Horn 2002: 71)

- (17) a. It's too bad that only Muriel voted for Hubert.  
 b. It's too bad that Muriel voted for Hubert.  
 c. It's too bad that no one distinct from Muriel voted for Hubert.
- (18) a. It's fortunate that only Hillary trusts Bill.  
 b. It's fortunate that Hillary trusts Bill.  
 c. It's fortunate that no one distinct from Hillary trusts Bill.

以上のような考察に基づき Horn (2002: 72) は、(19 a) 「K&P の診断法は断定のスコープに入らないものを明示し」、(19 b) 「NPI は下方伴立 (downward entailment) ではなく下方断定 (downward assertion) に敏感である」と結論付ける。

- (19) a. K/P (Karttunen and Peters) diagnostics demonstrate what's outside the scope of assertion, but not (necessarily) what's presupposed or conventionally implicated.  
 b. NPIs are sensitive to DOWNWARD ASSERTION, not DOWNWARD ENTAILMENT as such, hence the licensing properties of *barely* VP and *only* NP. (Horn 2002: 72)

Horn は、Only  $\alpha$  Fs が  $\alpha$  Fs を伴立すること、したがって Only  $\alpha$  が non-monotonic (非単調) であることを認めた。only NP は downward entailing ではない。しかし NPI を認可する。このジレンマを、Horn は、① Only  $\alpha$  Fs を主張する発話は、No one distinct from  $\alpha$  Fs という否定命題を断定し、 $\alpha$  Fs を断定しない、ということを示し、② NPI は意味論的概念である下方伴立 (downward entailment) ではなく、語用論的な下方断定 (downward assertion) に敏感であると主張することによって解決した、あるいはしようとしている、といえるだろう。批判的に検討している Atlas (2007) も、K&P の診断法の妥当性に疑問を投げかけているが、Horn の主張の本質的な部分には反論していない。

any や ever, lift a finger といった NPI は、not に代表される NPI 認可表現が作り出すその作用域の環境の中で容認される。そして、その NPI 認可表現の定義特性は、これまで完全に意味論的な DE 概念であるとされていたが、そうではなく語用論的な DA 概念であることが明らかになったことになる。意味論的概念が語用論的概念に取って代わられたのである。領域境界の視点から挑発的に言えば、意味論領域への語用論の侵入とも呼べるかもしれない。

## 1. 2 Yoshimura (1994) の The Cognitive Structure of Negation

Yoshimura (1992, 1994) 及び吉村 (1999) の一連の研究は、(20) に示したように、同じ NPI 認可表現の作用域に現れていても同じ NPI が容認される場合とされない場合があることに注目し、NPI は、(22) に示したように、それを含む発話が否定の認知構造において処理されることを要求する、という認知処理過程に対する手続き的制約を課すものであることを提案している。これは、一般には容認されない (20 b) が、(21) に示したように、否定の認知構造が成立する環境では完全に容認されることをうまく説明し、その妥当性が支持される。

- (20) a. If he *ever* drinks *any* water from that well, he will get dysentery. (吉村 1999: 4)  
 b. #If he *ever* takes *any* medicine, he will get better. (ibid.: 187)
- (21) a. We hope for his recovery, (#But) If he (#ever) takes (#any) medicine, he will get better.  
 b. He is seriously ill and will die sooner or later. We eagerly await his death, because his fortune will then be ours. **But if he ever takes any medicine, he will get better.** We should prevent that at all costs. (ibid.: 187)

## ② a. &lt;NPI に対する否定の認知構造条件&gt;

否定極性項目は、それを含む発話によって表される命題が、否定の認知構造において処理される場合にのみ容認可能である。

## b. &lt;否定の認知構造 (The Cognitive Structure of Negation (CSN))&gt;

中央系で処理される論理形式  $\phi$  と、その文脈に含まれる論理形式  $\psi$  が矛盾するような心的構造：

$\langle \phi, \{ \dots \psi \dots \} \rangle$  ただし  $(\neg(\phi \cap \psi))$

を否定の認知構造 (The Cognitive Structure of Negation) という。

(ibid.: 197)

この分析も、これまでの「NPI は認可表現の作用域に現れる」という統語論的・意味論的概念のみでは、その振る舞いを説明できないことを示し、認知処理プロセスに関する制約という認知語用論が重要な役割を果たしていることを明らかにしたものである。否定の認知構造というのは、最初に述べた否定の有標性と重なる。つまり、明示的否定文を処理する際に生じる心的構造を、明示的否定文以外の環境に現れる NPI も要求するということの意味する。これは、§ 1. 1 で見た Horn (2002) と同じ方向性、ことばの現象を説明するには語用論的側面が重要な役割を果たしていること、を示すものである。これまで「waste basket (ゴミ箱)」と呼ばれてきた語用論に光が当たりつつある、といえるのではないか。

## 2. 「尺度含意」と NPI 認可の関係

本節では、DE 環境における NPI 認可と「尺度含意 (scalar implicature)」の棚上げの相関関係に関する Chierchia (2004) の提案とそれに関連する議論を概観し、Chierchia (2004) が意味論の語用論領域への侵入と見なせる分析であることを指摘して、その妥当性を考える。まず Horn (1972: 96) によって導入された「尺度含意」の概念を確認しておこう。例えば、some を伴う (23 a) は一般に not all を含む (23 b) を会話的に含意する。Horn (1972: 48) は②のように、「『より強い』語が適用できるのに—もっと正確に言う—toより強い語が当てはまることを知っているのに、『より弱い』語を採用するのは一般に不適切である。誰かを記述するのに pretty を用いると、同じ尺度におけるそれより強い全ての要素、たとえば beautiful のような語が不適切であることを会話的に含意する」と述べている。この (23 b) や②の The girl is not beautiful にあたるものが「尺度含意」と呼ばれる。一般的には、⑤に示したように「尺度の弱い値を持つ発話  $p(i)$  は、それに対応する強い値  $p(j)$  を断定する立場にはいなかったことを含意する傾向がある。その結果その強い値の否定を含意する」と Horn (2004) は「尺度含意」を特徴付けている。⑥は尺度の例である。

③ a. Paul ate some of the eggs.

b. [For all the speaker knows] Paul did not eat all of the eggs. (③ a の「尺度含意」)

④ "... [I]t is generally inappropriate to employ the "weaker" term ... when the "stronger" term ... applies as well, or — more exactly — when we KNOW that the stronger applies. The use of *pretty* to describe someone, then, conversationally implicates the inappropriateness of every stronger element on the same scale, such as *beautiful*." (Horn 1972: 48)

⑤ "... [T]he utterance of a weaker scalar value ...  $p(i)$ ... tends to implicate that the speaker was not in a position to assert the correspondingly stronger value ...  $p(j)$ ... (thereby implicating against the stronger value)..." (Horn 2004: 12)

⑥ a. <all, most, many, some>

b. <beautiful, pretty>

c. <and, or>

Chierchia (2004) は、これまで語用論的現象として扱われてきた「尺度含意」が、局所的性格をもち、文法的で意味論的なものであるとする。その主張点は、①「尺度含意は局所的」に導入され、「尺度含意」は語用論的なものではなく意味論的なものだ、②「尺度含意」の棚上げと NPI 認可は共に DE 環境において生じ相関関係がある。どちらも強めの効果の観点から予測され説明される、というものである。第 1 の「尺度含意」の局所性から見ていこう。

「尺度含意」を導入した Horn を含む neo-Grice 派の分析では、尺度含意は、その尺度述語が含まれる文 (root 文) が文法によって基本的な意味を与えられた後に、Chierchia の用語を用いると globally (全体的) に、計算されて解釈に付加される、と考えられており、これが現在一般的な考え方である。しかしもしそうなら、埋め込まれた尺度含意は生じないはずであるが、それは事実と反する。例えば全体的計算アプローチでは、(27 a) の尺度含意は (27 b) になるはずだが、(27 a) の一般的解釈は (27 c) のような補文に尺度含意が生じる解釈である。

- (27) a. John knows that **some** students are waiting for him.  
 b. **It is not the case that** [John knows that **every** student is waiting for him].  
 c. John knows that some **though not all** students are waiting for him.

同様のデータを示すことによって、Chierchia (2004) は、(28) に示したように「尺度含意は、尺度を示す語が統語論における樹形図に導入されるとすぐにそれと同じ順番で局所的に導入される」と主張する。

- (28) "Its guiding idea is that [scalar] implicatures are introduced locally as soon as possible in the same order in which their trigger (the scalar terms) are introduced in the syntactic tree." (Chierchia 2004: 47)

そして、この「尺度含意」の局所性の仮説に基づき、NPI any が認可される否定的 (DE) 環境において「尺度含意」が棚上げされることを示し、NPI 認可と「尺度含意」の棚上げには相関関係があることを主張する。例えば、(29)(30) に示したように、決定詞 no については、それに続く名詞句相当部分の「限定部」も、その後に続く動詞句相当部分の「作用域」も DE 環境であり、any が認可される。一方、(31) に示したように、これと同じ環境において、尺度含意は棚上げされる。例えば or は not and という尺度含意を持つ (cf. (26 c))。Chierchia の言うように局所的に尺度含意が導入されると考えると、(31 a) 「不完全な成績か落第点を取った学生で評判のいい (立派な) ものは誰もいない」の no の限定部にある student with an incomplete or a failing grade は、その尺度含意を伴って「不完全な成績か落第点のどちらか一方を取った学生」と解釈されるはずである。しかし (31 a) のように no の限定部である DE 環境にこれが現れる場合、(31 b) に示したように、「実際、不完全な成績と落第点の両方を取った学生は立派である」といったような、or に伴って局所的に導入された尺度含意が no によって否定された表現が後続すると不適切になる。つまり DE 環境に尺度表現が現れても尺度含意は生じない (棚上げされる) のである。(31 c, d) が示すように、no の「作用域」にあたる動詞句部分についても同じことが言える。

(29) [NP **no** ( DE )] (VP DE )

(30) a. [**No** (Italian who eats *any* fish)](will eat it raw).

b. [**No** (Italian)]( eats *any* raw fish).

(31) a. [**No** (student with an incomplete *or* a failing grade)](is in good standing).

b. # While/ in fact a student with both is

c. [**No** (student who missed class)](will take the exam *or* contact the advisor).

d. #They will do both.

(adapted from Chierchia 2004: 49)

(32)–(35) の some と every の例も、DE 環境では尺度含意が棚上げされるが non-DE 環境では尺度含意が可能である

ことを示している。(32)に示したように、someはその「限定部」も「作用域」もDE環境ではない。そして(33)は、orが「限定部」に現れる(33 a)「不完全な成績か落第点のどちらか一方を取った学生が何人かいた」でも、「作用域」に現れる(33 b)「授業を受けなかった学生の中には、試験を受けるかアドバイザーに連絡を取るかのどちらか一方を望んでいる学生がいた」でも、「尺度含意」(not and)を伴う解釈になり、non-DE環境では尺度含意は可能であることを示している。一方(34)に示したように、everyの「限定部」はDE環境だが「作用域」はnon-DEである。そして(35 a)は、DEであるeveryの「限定部」に現れるorには尺度含意が生じない(棚上げされる、(35 b))が、(35 c)は、non-DEであるeveryの「作用域」に現れるorには尺度含意が生じることを示している。

(32) [NP **some** ( non-DE )] (VP non-DE )

(33) a. There was [**some** (student who had an incomplete *or* a failing grade)].

b. [**Some** (student who missed class)] (wanted to take the exam *or* contact the advisor).

(34) [NP **every** ( DE )] (VP non-DE )

(35) a. [**Every** (student who wrote a squib *or* made a classroom presentation)] (got extra credit).

b. #But not every students who did both got extra credit.

c. [**Every** (student)] (wrote a squib *or* made a classroom presentation).

(adapted from Chierchia 2004: 50)

Chierchiaは、if節や否定的ニュアンスを持つ動詞の補文、before節他、多くのDE環境において「尺度含意」が棚上げされることを示し、「anyが認可される環境(DE環境)において、尺度含意は棚上げされる」と結論付ける。さらに議論を進め、DE環境では単に尺度含意が棚上げされるのではなく、否定的尺度に基づく新しい含意が再計算されているとし、(36 a)「ジョンは多くの言語学の本を読んだ」に伴われる(36 b)「全て読んだわけではない」のような肯定的尺度に基づく尺度含意を直接含意(direct implicature)、(37 a)「ジョンが多くの言語学の本を読んだことを私は疑う」によって伴われる(37 b)「いくらかは読んだとは思う」のような否定的尺度(<not some, not many, not all> cf. (40 c))に基づく尺度含意を間接含意と呼んで、間接含意は直接含意よりも弱いと主張する。

(36) a. John read many linguistics books.

b. John didn't read all the linguistics books. (many → not all: direct implicature)

(37) a. I doubt that John read many linguistics books.

b. I believe he read some. (not(doubt) many → not (not some)=some: indirect implicature)

(Chierchia 2004: 59)

NPI認可と尺度含意の棚上げという異なる現象が、同じタイプの文脈に反応することを、Chierchiaは強めの効果によって説明する。まず尺度含意についてみると、尺度含意を付加することは、合成的に計算したプレーンな意味よりも強くなるという。例えばorとsomeという2つの尺度表現を伴う(38 a)の解釈を考えてみよう。(38 b)はその解釈の可能性を示しているが、そのままのnon-DE環境では、orの尺度含意 $\neg(\text{smoke}'(x) \wedge \text{drink}'(x))$ とsomeoneの尺度含意 $\neg\text{everyone}'(\lambda x \text{smoke}'(x) \vee \text{drink}'(x))$ の両方を伴うiiiが一番強く、どちらの含意も伴わないiの解釈が一番弱いと見なされる。これは(38 biii)は(38 bii)を伴立し、(38 bii)は(38 bi)を伴立することに基づく。しかしこれがDE環境(つまり否定的環境)に生じると、尺度含意の付加は結果として解釈を強めることにならないため「尺度含意」は棚上げされるのだと説明する。

(38) a. Someone smokes or drinks.

b. i.  $\text{someone}'(\lambda x \text{smoke}'(x) \vee \text{drink}'(x))$



- ii.  $\text{someone}'(\lambda x (\text{smoke}'(x) \vee \text{drink}'(x)) \wedge \neg(\text{smoke}'(x) \wedge \text{drink}'(x)))$
- iii.  $\text{someone}'(\lambda x (\text{smoke}'(x) \vee \text{drink}'(x)) \wedge \neg(\text{smoke}'(x) \wedge \text{drink}'(x)))$   
 $\wedge \neg \text{everyone}'(\lambda x \text{smoke}'(x) \vee \text{drink}'(x))$

NPI については、any は想定される量化ドメインを拡大する存在量化詞であるという Kadmon and Landman (1993) の分析に基づき、DE 環境では、any が単純な存在を表す対応物よりも強められより多くの情報を持つと主張する。例えば、(39 a) は凍ったポテトを除いたドメインを心に描いて発話されうるが、(39 b) はその凍ったポテトまで含むようにドメインを拡大して「凍ったポテトさえ持っていない」と理解される。(39 a) よりも (39 b) の方が強いのである。non-DE 環境ではドメインを拡大しても強めが起こらないため容認されないと説明する。

- (39) a. I don't have a potato.  
 b. I don't have any potatoes.

以上のように、Chierchia (2004) は、①意味の合成プロセスに従って、尺度含意は局所的に派生され上方に投射されること、②NPI 認可と「尺度含意」の棚上げが DE 環境に敏感なのは、両者が強めの制約に従っているためであること、したがって、③語用論的システムのいくらかは grammar 的なものであることを主張する。

これに対して Sauerland (2004) は、同じ投射事実についてネオグライス的分析を示し、Blutner (2004) は語用論的意味の合成的見解へ異議を唱えている。Horn (2006) は、①合成性の問題と文法的/意味論的地位の問題は別物であること、②DE 環境に見られる間接尺度含意が肯定尺度に基づく直接尺度含意よりも弱いことは事実として支持できないこと、③「尺度含意」も NPI も強めの効果を持つとはいえないこと、を示して反論する。

①についていうと、確かに語彙レベルで語用論が作用する現象は少なからずあり、アドホック概念や語彙的ギャップの問題を扱う lexical pragmatics の領域が確立していることから分かるように、それらがイコール狭義の文法の問題になるわけではない。②について Horn (2006) は、Chierchia とは正反対の文法判断をする Chomsky (1972) があることを指摘し、(40)(41)に示したように、肯定尺度と否定尺度は対称的なものであり、それに基づく尺度含意に強弱の差異を認めない。

- |                                     |                                   |
|-------------------------------------|-----------------------------------|
| (40) a. Some F are G.               | (41) a. Not all F are G.          |
| b. Some Fs are Gs, but not all are. | b. Not all F are G, but some are. |
| c. <all, most, many, some>          | c. <none, few(not many), not all> |

さらに Chierchia の主張を根本的に覆す可能性がある反論が、③の「尺度含意」は解釈を強めない、というものである。Horn (2006) は従来から主張している(42)に示した含意の2元モデルに基づき、(43)に示したように「Q 含意は断定の力を強めないが、R 含意一般は強める」と主張する。(44 a)「彼女は課題を完成することが出来た」は(44 b)「完成した」を R 含意し、(44 b) は(44 a) を強めたものだと見なすことができる。一方(45 a)「彼女が課題を完成した可能性はある」は(45 b)「彼女が課題を完成した可能性はあるが確かではない」を Q 含意し、これは断定の力を強められたものとは見なせないというのである。

(42) Horn's Dualistic Model of Implicatures

- a. Q principle: Say as much as you can. (or "Say enough.")
- b. R principle: Say no more than you must. (or "Don't say too much.") (Horn 2004: 13)

(43) "While Q-based implicatures do not strengthen the force of an assertion, R-based implicatures in general do." (Horn 2006: 31)

(44) <R 含意> 強めが起こる

- a. She was able to complete the assignment.
- b. She completed the assignment.

(45) <Q 含意> 強めが起こらない

- a. It is possible that she completed the assignment.
- b. It is possible but not certain that she completed the assignment.

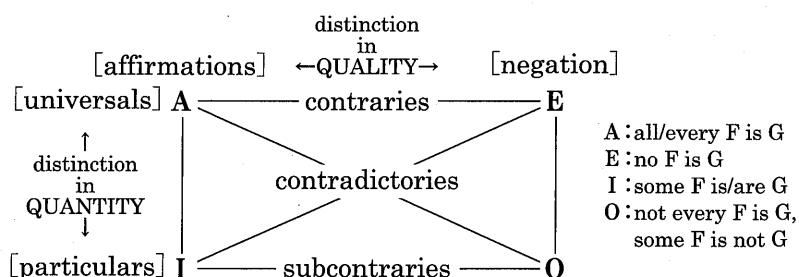
NPI が強めの効果を示すという点も支持できない。たとえば NPI の much を伴う (46 a) がそれを伴わない (46 b) の否定の力を強めていないことから、Israel (1996) が述べているように、much や overmuch, long などの一群の NPI は否定の力を強めないといえる。

- (46) a. He doesn't read.  
b. He doesn't read *much*.

以上のことから、(通言語的あるいは1言語内の項目の) NPI 認可と尺度含意の誘発と阻止の差異の間の相関関係は証明されないと主張する。

「尺度含意」に関して、もう1点触れておかなければならないのは、伝統的なアリストテレス後の「対当の方形」(post-Aristotelian Square of Opposition) に関して、自然言語において常にO頂点の語彙を欠くのは、この尺度含意があるためだと説明できることである。(47)の全称肯定A頂点は all や every、特称肯定I頂点は some、全称否定E頂点は no という単一の語彙に対応するが、特称否定O頂点は not every あるいは some not と表現するしか方法が無く、対応する単一の語彙が存在しない。これは(48)に示したように様々なタイプの表現に当てはまり、例えば縦2列目を見ると、頻度を表す副詞について、always, sometimes, never と A, I, E 頂点の語彙は存在するが not always を意味する O には対応する単一語彙が存在しない。

(47) <対当の方形 (Square of Opposition)>



(48)	DETERMINERS/ QUANTIFIERS	QUANT. ADVERBS	BINARY QUANTIFIERS	CORRELATIVE CONJUNCTIONS	BINARY CONNECTIVES
A :	all $\alpha$ , everyone	always	both (of them)	both ... and	and
I :	some $\alpha$ , someone	sometimes	one (of them)	either ... or	or
E :	no $\alpha$ , no one (=all $\sim/\sim$ some)	never (=always $\sim$ )	neither (of them) (=both $\sim/\sim$ either)	neither ... nor (=[both ... and] $\sim$ )	nor (=and $\sim$ )
O :	*nall $\alpha$ , *neveryone (=some $\sim/\sim$ all)	*nalways (= $\sim$ always)	*noth (of them) (=either $\sim/\sim$ both)	*noth ... nand (=[either ... or] $\sim$ )	*nand (=and $\sim/\sim$ or)

(Horn 2006: 40)

これは、小反対関係にある I と O は、I の some が尺度含意によって O 頂点の not all を含意し、一方 O 頂点の

not all は、否定尺度 <not some, not many, not all> に基づく尺度含意によって I の some (=not (not some)) を含意するという、相互に含意しあう関係にあるためだと、Horn (2006: 41) は(49)に示したように、「肯定と否定の小反対が相互に Q 含意しあう関係にあるため、語彙的実現にとっては2つのうちの一方が余分であるという結果になる。一方、否定の機能的有標性のため、語彙化されない小反対は、常に I ではなく O である」と主張する。このように、「尺度含意」に関わる語彙化についても否定の有標性が大きな役割を果たしているのである。

(49) “The relation of mutual quantity implicature holding between the positive and negative subcontraries results in the superfluity of one of the two for lexical realization, while the functional markedness of negation (see Horn 1989 for a comprehensive review) assures that the unlexicalized subcontrary will always be O rather than I.” (Horn 2006: 41)

以上のように、語彙レベルで語用論が作用する現象は少なからずあり、アドホック概念形成や上記語彙的ギャップの問題を扱う lexical pragmatics の領域が確立していることから分かるように、局所性がイコール狭義の文法の問題になるわけではない。これは先ほどの Chierchia の主張点③の反論と見なすことができる。つまり、合成性の問題と文法的/意味論的地位の問題は別物であることを示しているということである。

以上第2節では「尺度含意」に関する意味論と語用論の境界領域の論争を見た。「尺度含意」は、もともと Horn (1972) によって導入された現象で、完全に語用論的な現象として捉えられてきたものである。それに対して Chierchia (2004) は、「尺度含意」は、尺度表現が統語的な樹形図に現れた時点でその場所に局所的に導入され、それが DE 表現に埋め込まれると (DE 環境に置かれると) 今度は取り消される、といった構文文法的/意味論的な側面を持つ現象であると主張した。これは、「尺度含意」という現象の理論的位置づけについて、語用論ではなく統語論的意味論的側面の現象であることを主張するものであり、先の言い方にならえば、統語論意味論の語用論領域への侵入、と見なすことができる。しかし、埋め込み文の中に「尺度含意」が生じうるといった事実の指摘には興味深いものが見られるが、既に見たように、この理論的地位に関する分析は支持されない。

### 3. 結語

本稿では、否定の語用論研究の現在を概観し、NPI 認可と「尺度含意」という2つの現象について、意味論統語論と語用論の境界論争が生じている現状を報告して、否定研究の大きな流れの方向性を示した。

NPI 認可現象は、Klima (1964) の統語論的分析に始まる。それは、否定辞に c 統御される (当時は「～と構造をなす」) 範囲において NPI が認可されるというものであった。しかし NPI を認可する表現は、not に代表される明示的な否定辞と呼ばれるものをはるかに超えて広がっており、そこには if や without, reject などが含まれる。このような非常に多様な NPI 認可表現に共通する意味素性として、下方伴立 (DE) 特性が Ladusaw (1980) によって提案された。NPI 認可に関する意味論的分析である。しかし、only や barely のような、DE 特性を示さないのに NPI を認可する表現があることを説明することが出来なかった。このような表現までもを包括する概念として、下方断定 (downward assertion) 特性という語用論的特性が Horn (2002) によって提案されたのである。さらに吉村 (1994, 1999) は、NPI の認可は、統語的構造条件や NPI 認可表現の共通特性だけでは適切に予測できず、NPI を伴う発話が処理される際の心的環境に対する条件も必要であることを明らかにしている。これは認知語用論的条件 (否定の認知構造の要求) であり、最初に述べた否定の語用論的有標性が NPI 認可にも大きな役割を果たしていることを示している。以上のように、NPI 認可の分析は、統語論から意味論、そして (認知) 語用論へと発展し、今その (認知) 語用論的分析の重要性がますます注目されつつある。

一方「尺度含意」は、Horn (1972) によって導入され、完全に語用論的な現象だと見なされてきたものだが、Chierchia (2004) は、埋め込み文が尺度含意を持つこと、つまりその局所性、に基づいて派生プロセスをモデル化し、「尺度含意」は語用論的現象ではなく、文法的意味論的現象であることを主張した。挑発的な言い方をすれば、

語用論への統語論意味論の侵入である。しかし、補文が「尺度含意」を伴うことを含む事実の指摘には興味深いものがあるが、局所性＝文法的意味論的ではないことが明確になり、樹形図に尺度表現が現れるのと同時に「尺度含意」が導入され、DE表現に埋め込まれると取り消されるという派生モデルが Noveck (2006) の実験によって反証されるなど、その妥当性は支持されることが明らかになってきている。そして「尺度含意」という語用論的現象は、対当の方形の○頂点が語彙化されないことをも説明するものなのである。この「尺度含意」に関わる論争においても語用論的分析の妥当性が支持されているといえる。

かつて語用論という領域は「ゴミ箱 (waste basket)」(Gazdar 1979)と呼ばれていた。様々な現象を分析していて良く分からない部分はみなこのゴミ箱に投げ込まれた。しかしことばの研究が進歩発展し続けた結果、「ゴミ箱」の理論的整備は著しく進み、ことばを分析する際に、語用論が(つまりは人の行う推論や認識に関する側面が)重要な役割を果たしていることが明らかになりつつある。否定の語用論研究の現在を概観し、その動きを分析することによって、ことばの研究の大きな流れを多少浮き上がらせることが出来たのではないかと思う。

#### <主要参考文献>

- Atlas, Jay David (2007) "On a Pragmatic Explanation of Negative Polarity Licensing," *Pragmatics*, ed. by Burton-Roberts, Noel, 10-23, Palgrave Macmillan, Hampshire.
- Chomsky, Noam (1972) "Some Empirical Issues in the Theory of Transformational Grammar," *Goals of Linguistic Theory*, ed. by Peters, Stanley, 63-130, Prentice-Hall, Englewood Cliffs, NJ.
- Blutner, Reinhard (2004) "Pragmatics and the Lexicon," *The Handbook of Pragmatics*, eds. by Horn, Laurence R. and Gregory Ward, 388-519, Blackwell, Oxford.
- Carston, Robyn (2005) "Relevance Theory, Grice and the Neo-Griceans: A Response to Laurence Horn's 'Current Issues in Neo-Gricean Pragmatics,'" *Intercultural Pragmatics* 2, 303-20.
- Chierchia, Gennaro (2004) "Scalar Implicatures, Polarity Phenomena, and the Syntax/Pragmatics Interface," *Structures and Beyond*, ed. by Belletti, Adriana, Oxford University Press, Oxford.
- Givón, Talmy (1978) "Negation in Language: Pragmatics, Function, Ontology," *Syntax and Semantics* 9, ed. by Cole, Peter, 69-112, Academic Press, New York.
- Grice, Paul H. (1989) *Studies in The Way of Words*, Harvard University Press, Cambridge, MA.
- 東森勲・吉村あき子 (2003) 『関連性理論の新展開 —認知とコミュニケーション—』研究社、東京。
- Horn, Laurence R. (1969) "A Presuppositional Analysis of *only* and *even*", *CLS* 5, 97-108.
- Horn, Laurence R. (1972) *On the Semantic Properties of Logical Operators in English*, Ph.D Dissertation, UCLA, Dis-tributed by the Indiana University Linguistics Club, 1976.
- Horn, Laurence R. (1989, 2001<sup>2</sup>) *A Natural History of Negation*, University of Chicago Press, Chicago, (2001<sup>2</sup>, CSLI Publications, Stanford).
- Horn, Laurence R. (2002) "Assertoric Inertia and NPI Licensing," *CLS* 38 Part 2, 55-82.
- Horn, Laurence R. (2004) "Implicature," *The Handbook of Pragmatics*, ed. by Horn, Laurence R. and Gregory Ward, 3-28, Blackwell, Malden, MA.
- Horn, Laurence R. (2005) "Current Issues in Neo-Gricean Pragmatics," *Intercultural Pragmatics* 2, 191-204.
- Horn, Laurence R. (2006) "The Border Wars: A Neo-Gricean Perspective," *Where Semantics Meets Pragmatics*, eds. by von Heusinger, Klaus and Ken Turner, 21-48, Elsevier, Oxford.
- Horn, Laurence R. (2006) "More Issues in Neo- and Post-Gricean Pragmatics: A Response to Robyn Carston's Response," *Intercultural Pragmatics* 3, 81-93.
- Israel, Michael (2004) "The Pragmatics of Polarity," *The Handbook of Pragmatics*, eds. by Horn, Laurence R. and Gregory Ward, 701-723, Blackwell, Malden, MA.

- Kadmon, Nirit and Fred Landman (1993) "Any," *Linguistics and Philosophy* 16, 353-422.
- Karttunen, Lauri and Stanley Peters (1979) "Conventional Implicature," *Syntax and Semantics 11: Presupposition*, ed. by Oh, Choon-Kyu and David A. Dinneen, 1-56, Academic Press, New York.
- Klima, Edward S. (1964) "Negation in English," *The Structure of Language*, ed by Foder, Jerry A. and Jerrold J. Kats, 246-323, Prentice-Hall, Englewood Cliffs, NJ.
- Ladusaw, William (1980) "On the Notion of 'Affective' in the Analysis of Negative Polarity Items," *Journal of Linguistic Research* 1, 1-16.
- Noveck, Ira A. (2004) "Pragmatic Inferences Related to Logical Terms," *Experimental Pragmatics*, eds. by Noveck, Ira A. and Dan Sperber, 301-321, Palgrave, New York.
- 太田 朗 (1980) 『否定の意味』大修館、東京。
- Sauerland, Uli (2004) "Scalar Implicatures in Complex Sentences," *Linguistics and Philosophy* 27, 367-391.
- Yoshimura, Akiko (1992) "The Cognitive Structure of Negation as an NPI-Licensing Condition," *English Linguistics* 9, 244-264.
- Yoshimura Akiko (1994) "A Cognitive Constraint on Negative Polarity Phenomena," *BLS* 20, 599-610.
- 吉村あき子 (1998a) 「英語における否定環境の意味論的階層性」、大阪学院大学外国語論集第37号、130-151、大阪学院大学外国語学会。
- 吉村あき子 (1998b) 「否定極性へのアプローチ —否定極性現象の意味論的・認知語用論的側面—」、『英語青年』、第144巻 第9号、544-546、研究社、東京。
- 吉村あき子 (1999) 『否定極性現象』、英宝社、東京。
- 吉村あき子 (2000a) 「\*一滴でも飲まなかった/\*飲んだ」、『言語』第29巻 第11号、52-58。
- Yoshimura, Akiko (2000b) "Review: Ton van der Wouden: Negative Contexts: Collocation, Polarity and Multiple Negation," *Studies in English Literature, English Number 2000*, 136-142.
- 吉村あき子 (2000c) 「日本語の否定環境」、『藤井治彦先生退官記念論文集』、961-972、英宝社、東京。
- 吉村あき子 (2001) 『極性文脈の認知メカニズム』平成10年度～平成11年度 科学研究費補助金 (基盤研究 (C)(2)) 研究成果報告書。

## Border Issues around Pragmatic Studies on Negation

YOSHIMURA, Akiko

This paper surveys the two border issues around pragmatics studies on negation, i.e. NPI-licensing and scalar implicatures, and shows the directionality of the present linguistic research of negation.

The modern linguistic study on negation starts with the syntactic research by Klima (1964), which claims that negative polarity items (NPIs) such as *any*, *ever*, or *lift a finger* are licensed if they are in construction with (c-commanded by) negative particles. Ladusaw (1980) proposed the notion of “downward entailment” as a unifying semantic property common to NPI-licensing expressions including *if*, *without*, *reject*, etc, but incorrectly excluding *only* and *barely*, etc. And then Horn (2002) replaces the semantic notion “downward entailment” with the pragmatic “downward assertion” which properly captures the range of NPI-licensing expressions. Yoshimura (1999) also reveals that a cognitive pragmatic condition plays an important role in NPI-licensing, i.e. NPIs demand to be processed in the Cognitive Structure of Negation.

Chierchia (2004) points out the locality of scalar implicatures, which have been regarded as pragmatic instantiations, and claims that scalar implicatures are grammatical and semantic phenomena rather than pure pragmatic ones. Horn (2006) and Noveck (2006) offer convincing evidence against his claim. Chierchia was right in finding the locality of scalar implicature but not in stipulating their theoretical status. Scalar implicatures are properly treated in pragmatics.

The research field of pragmatics has been called “waste basket,” into which every part that researchers do not analyze appropriately has been thrown away. Now it is gradually getting clear that pragmatics plays a crucial role in analyzing linguistic phenomena.